

JAPAN JOURNAL OF GOLF EDUCATION

ゴルフ教育研究

Vol.3 No.1

CONTENTS

《論文》

- ゴルフ用品提供事業から見た
大学ゴルフ授業で使用しているゴルフクラブの現状 高橋宗良ほか 1
大学ゴルフ授業における ICT 活用の実態 浅井泰詞ほか 7

《資料》

- 『ゴルフスイング体操®』をおこなった受講生たちの感想
ーこの感想の集計結果から推測される「大学ゴルフ授業」の課題と目標ー
松村公美子 15

《産学協同実践報告》

- 『ゴルフの安全チェックリスト』の作成について 橋口剛夫 26

《その他》

- ゴルフの学校教育への参入を目指す産業界と
そのために必要なこと 北 徹朗 31
第4回大学ゴルフ授業研究会発表プログラム 33

《開発教材・教具一覧》

- 34

大学ゴルフ授業研究会

【論文】

ゴルフ用品提供事業から見た

大学ゴルフ授業で使用しているゴルフクラブの現状

高橋宗良(鎌倉女子大学)、北 徹朗(武蔵野美術大学)

Actual condition of golf clubs for university golf class
: From the Golf-club-supply project

Muneyoshi TAKAHASHI(Kamakura Woman's University), Tetsuro KITA(Musashino Art University)

1

キーワード: 大学ゴルフ授業、ゴルフクラブ、ゴルフ用品提供

【要旨】

2016年、日本ゴルフ用品協会と全国大学体育連合は、大学に対するゴルフ用品提供に関する協定を結んだ。本研究は、ゴルフ用品提供を求める大学を対象とし、ゴルフクラブおよび授業の現状について明らかにすることを目的とした。

その結果、大学が保有しているゴルフクラブは少なくとも10年以上経過しており、劣化が進行している可能性が示唆された。また、需要は、男子用・女子用ともにウッド系クラブが高く、さらに左用クラブの需要も高い傾向が認められた。申請理由として、不足している番手の補充に加え、大学における経費削減でクラブの補充と交換が十分できないことが示唆された。

【はじめに】

大学における体育科目は、1991年に施行された大学設置基準の大綱化以降、選択科目化と廃止が進み、1998年には必修率は45.8%にまで低下している(田中, 2012)。この傾向は、2005年には回復し、大学体育の必修化が復調してきたとの報告(井上, 2016)もあるが、これは母集団に偏りがあることに加え、回収率が極めて低いため、大学体育の実態を表して

いるとはいいがたい。すなわち、本邦においては、大学における体育系科目は縮小傾向であることを否定し切れないものと考えられる。

一方で、大学体育で取り扱う種目自体は多様化しており、著者の経験でも、学習指導要領に記載されているような伝統的体育種目の他に、フィットネス、クライミング、スノーボード、合気護身術など多岐に渡っている。ゴルフはそれらの種目の中でも、一般に最もプレー環境が整っている種目の一つであり、多くの大学において授業が展開されている。北ほか(2016)は本邦におけるほぼ全ての大学のシラバスを調査し、その結果、大学においてゴルフを担当している教員数はのべ581人であることを報告している。これは他の種目に比べても多い人数であり、高等学校までの学習指導要領において原則取り扱いがない種目にもかかわらず担当者数が多い種目であるといえよう。

ところで、ゴルフ用品は単価そのものが割高であり、大学の授業において受講生数に見合った用具を準備するにはある程度の予算が必要となってくる、しかしながら、先述の通り大学体育そのものは縮小傾向にあり、一般教養かつ選択科目である体育にこれを充当するだけの予算を充てる大学はそれほど多

くないと考えられる。すなわち、大学におけるゴルフ授業においては、当初準備した用具、旧式で劣化しているゴルフクラブを使用せざるを得ない状況に陥っている可能性が高いと推察される。旧式で劣化したクラブの使用は、学習効果の問題に加え、安全性の観点からも問題を内在しており、是正は急務であると考えられる。また、ゴルフ用具の性能は他の科学技術と飛躍的に進歩しており、より高性能なクラブが次々と開発されている。すなわち、ゴルフについて言えば、大学だけが用具の面で大きく取り残されているものと考えられる。

このような現状に対して、大学ゴルフ授業を充実させる目的で、(公社)全国大学体育連合(大体連)、(公社)日本プロゴルフ協会(PGA)、ゴルフ市場活性化委員会(GMAC)が産学連携協定を結んだ(2016年6月)。この協定の中には、(一社)日本ゴルフ用品協会(JGGA)に加盟するゴルフ用品メーカー各社による大学ゴルフ授業に対する用品(クラブ)提供事業があり、大体連会員校のうちゴルフ授業を展開している大学にゴルフクラブを提供することとなっている。これにより、大学としては無償(送料のみ負担)でクラブの提供を受けることができ、ゴルフ授業を充実させることが可能となった。

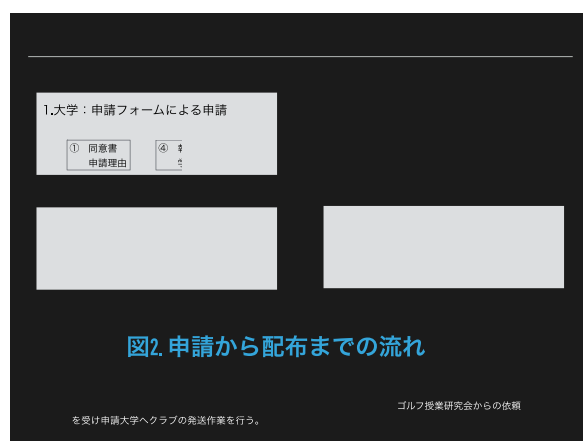
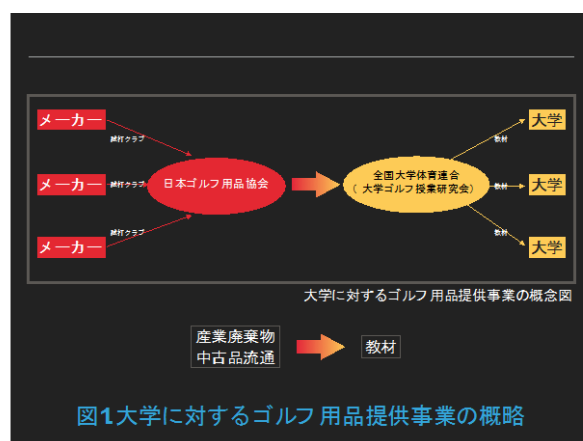
そこで本研究では、ゴルフ用品提供事業について概観し、大学のゴルフ授業において使用しているゴルフクラブの現状を把握することを目的とした。

【ゴルフ用品提供事業の概要】

本事業の窓口は、ゴルフ用品提供側としては(一社)日本ゴルフ用品協会が、大学側としては(公社)全国大学体育連合が担当となっている。実務上の窓口は大学ゴルフ授業研究会が担い、大学と日本ゴルフ用品協会を結んでいる(図1)。

本事業における、申請から配布までの流れについては図2に示した通りである。まず、ゴルフ用品の提供を希望する大学は、大体連ホームページを通じて必要事項を申請する。申請書類は、希望クラブ種

類および本数、ゴルフ授業の実施状況、ゴルフクラブの現況、所有権移転に関する同意書である。また、クラブの提供を受けた後に、これを使用した授業後、報告書の提出とともに、受講生に対するアンケートを実施することが義務づけられている。なお、大体連の意向により、本申請ができるのは、大体連会員かつ大学会員に限定されており、さらに1回の申請につき上限が40本(内ショートアイアン10本)とされている。これにより大学は送料のみの負担で最新モデルを含むクラブを入手することができる。



本事業における第1回目の提供クラブの内訳を表1に示した。大学に対しては、提供クラブの種類のみを告知し、数量については告知しなかった。クラ

ブの種類については、番手毎の供給量にバラツキがあるため、表1に示したように分類した（ドライバー、ドライバー以外のウッド、ロングアイアン、7番アイアン、ショートアイアン；左用は7番アイアンのみ）。また、希望が集中した場合には、申請が重複した大学間で需給調整をした後、配分した。

表1用品提供事業における 第1回目の供給量内訳

提供クラブの種類のみを告知

	男子用	女子用	左	
W1: ドライバー	81	13	0	
W: ドライバー以外のウッド	32	18	0	
L-I: 6Iより 長いアイアン	77	0	0	
7I: 7番アイアン	482	94	5	
S-I: 8番以下のアイアン	51	28	0	
供給の範囲内で配布	total	723	153	5

【方法】

1. 対象

調査対象は、JGGAによる大学ゴルフ授業への用品提供申請者を対象としている。なお、本申請の出願要件として、大体連大学会員であること、用具管理者としての事務職員責任者を設定すること、所有権移転に関する同意書の提出が求められている。さらに提供を受けた後の授業終了時に、担当教員による報告書および受講生によるアンケートの提出をすることも必要となっている。なお調査対象は、2016年7月11日～10月6日までの申請とした。

2. 調査項目

調査項目は、本事業への申請理由、ゴルフ授業の概要、および必要なクラブの種類と本数であった。申請理由については自由記述で回答を得た。必要とするクラブの本数については、表1に示したクラブの分類に基づき、それぞれについて必要量（本数）を回答させた。

3. 申請理由の分析方法

自由記述によって得た申請書の回答項目について、以下の観点で整理した。

(1) 現況（保有数）

(2) 現有クラブの使用期間

(3) 劣化の程度

(4) 使用頻度

(5) 受講者数

(6) 学外実習の有無

【結果】

本調査期間において、ゴルフ用品提供申請をした大学は22大学（23申請）であった（複数学部での申請があった1大学を含む）。本事業において大学から提供希望申請のあったクラブの内訳、すなわちクラブゴルフ需要量については図3に示した通りであった。男性用ではドライバー（W1）の希望が最も多く（133本）、次いでドライバー以外のウッド（W；94本）、ロングアイアン（L-I；6番アイアンより長い番手のアイアン；76本）、7番アイアン（7-I；63本）、ショートアイアン（S-I；51本）の順に多かった。女性用では、ドライバー以外のウッドが最も多く（114本）、次いでドライバー（113本）、ショートアイアン（51本）、7番アイアン（32本）の順に多かった。なお左用のクラブ供給は7番アイアンのみであり、申請数は86本であった。

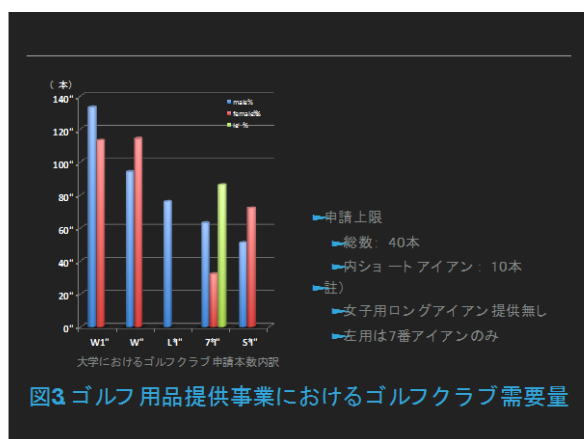


図3 ゴルフ用品提供事業におけるゴルフクラブ需要量

図4は、男女別の申請総数に対するクラブ種類毎の申請割合を示したものである。なお、女性用ではロングアイアンの供給がなかったため0%となっている。また、左利き用は7番アイアン以外の供給がなかったため対象としなかった。

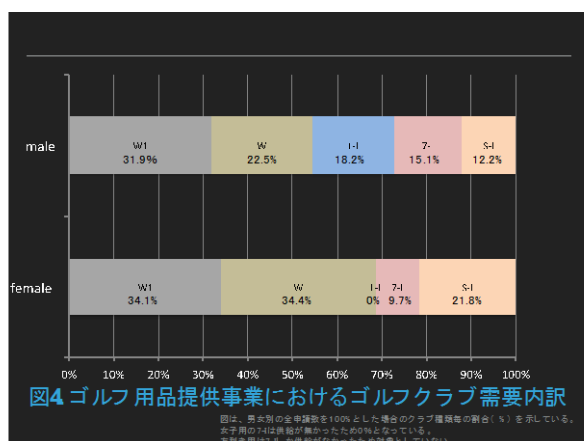


図4 ゴルフ用品提供事業におけるゴルフクラブ需要内訳

男性用・女性用ともにウッド系クラブの申請が半数以上を占めていた。またショートアイアンは男性用に比べ、女性用の方が高い割合だった（12.2% vs 21.8%）。7番アイアンの申請は、男女とも10%程度であった（男性用：15.1%、女性用9.7%）。

表2 申請理由

理由	回答：大学数			
現行数	無し：3	不足：1	番手の偏り：5	必要十分：9
使用期間	未回答：11	10-15年：4		20年+：3
劣化の程度	(不足番手の補充：4)		激しい：14	
使用頻度	半期：2	オムニバス：1	集中：2	TBG：1
受講者数	未回答：13	20人：1	30-40人：3	500人：1
学外実習	検討中：1	予定：1	年1回：1	年2回：1

申請理由については表2にまとめた。番手の偏りがあるとするのが5大学である一方で、必要十分な量を保有しているとするのは9大学であった。また、劣化の程度が激しいとする大学が14大学、使用期間が20年超とするのが3大学、10～15年が4大学であった。

【考察】

高等学校までの学習指導要領において、ゴルフは原則的に取り扱いがない。また、高等学校までのゴルフの大会は少なく、ゴルフ部を有する学校も多くはない。そのため、大学ゴルフ授業の受講生は、大半がゴルフ初心者であると考えられる。

ゴルフ初心者にとって扱いやすいクラブは短いクラブであることに加え、専用のドライビング・レンジが無い場合、教場外への打ち込みを予防するためには飛距離の短いクラブの方が安全であることから、本事業における大学からの提供申請は短いクラブに集中すると考えていた。しかしながら、本結果からショートアイアンへの申請は他のクラブに比べて少ないことが明らかになった。

これについては、本事業開始にあたってショートアイアンに申請が集中することを予想し、その申請上限を1大学10本までに制限をしたことを考慮しなくてはならないが、その上限まで申請した大学はほとんど無かった（男性用で2大学、男女合計で4大学）。

一方、申請理由としての現行数について見てみると、番手に偏りがあるとする大学は5大学にとどまり、

必要十分とする大学は9大学であった（表2）。ところが、保有するクラブの状態についてみると、劣化が激しいとする大学が14大学、試用期間が20年を越える大学が3大学、10～15年とする大学が4大学であった。以上を鑑みると、大学ゴルフ授業では、ゴルフ授業を開講した時期に必要なクラブの数を準備したものの、その後十分な補充がないことから、現在に至るまで当時と同じクラブを使用していることが示唆される。

ゴルフにおけるクラブ開発は、他のスポーツ競技同様飛躍的に進歩し、より簡単により遠くに打つことのできるクラブが数多く出回っている。ゴルフ授業における用具についても、その様なクラブを使用することで教育効果を向上させることが期待されるが、現状のように古いクラブを使用している状況では、ゴルフ技術の獲得のハードルも上がり、学生のゴルフに対するモチベーションを十分に高めることはできないことが示唆される。

一方、ウッド系のクラブの申請数は、全申請数の半数以上を占めていた。10年以上前のクラブを使用している大学が7大学あり（表2）、これを考慮すると、依然としてパーシモンやメタルなどのウッドしか保有していない大学が少なくないことが示唆される。このことからウッド系のクラブの申請数が多かったものと考えられる。

ところで、パーシモンやメタルのウッドでの打撃練習では、スイートスポットにボールを当てることが難しいことから、ゴルフ初心者である受講生に高い技術と忍耐力を強いることが容易に想像できる。また、アイアンについても10年以上前のクラブを大学で使用しているとするとスチールシャフトや古いカーボンシャフトのものである可能性が高い。アイアンのヘッドも、最新のものに比べれば難易度の高いものであると考えられる。これでは、十分な教育効果を得る前に、受講生の多くがゴルフの継続を挫折してしまうことが予想される。大学ゴルフ授業受講生にゴルフの醍醐味を味合わせ、ゴルフに対して

ポジティブな態度を育成するためには、用具の観点からは、一定水準以上のクラブを継続的に補充することが望ましいと考える。

なお、本事業はこのような大学ゴルフ授業の教育環境を著しく改善する可能性のある事業であり、同時に学生のゴルフに対するモチベーションを高める効果も期待できると考えている。本事業が発展することがゴルフ普及と活性化のために重要な役割を担っているものと考えている。

【まとめ】

本研究の結果、以下の点が明らかになった。

1. ゴルフ用品の需要について
 - (1) ウッド系クラブの需要が高かった。
 - (2) ショートアイアンに比べてロングアイアンの需要が高かった。
 - (3) 左用クラブの需要が高かった。
2. 大学が使用しているクラブの現況
 - (1) クラブの番手に偏りがある。
 - (2) 10年以上同じものを使用している。
 - (3) 経費削減化で新規補充は困難である。

【参考文献】

1. 田中誠一ほか（2012）：大学体育の果たす役割に関しての再考．成城大学経済研究（195）75-92.
2. 井上直子（2016）：大学体育・スポーツの立場からの意見．スポーツ審議会スポーツ基本計画部会資料。
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/001_index/bunkabukai/shiryo/_icsFiles/afie1dfile/2016/08/05/1375312_009.pdf (2016.8.13 閲覧)
3. 政府統計の窓口．大学の学校数、在籍者数、教職員数（昭和37年～）：学校基本調査>年次統計．

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001015843> (2016.8.13閲覧)

4. 北徹朗ほか (2016) 大学ゴルフ授業における雨天時授業、安全対策、ICT教材利用の実態調査. 大学体育107号: 106-112.
5. 日経平均株価の推移,世界経済のネタ帳.
<http://ecodb.net/stock/nikkei.html> (2016.12.1閲覧)
6. 文部科学省 (1991) : 大学設置基準の一部を改正する省令の施行等について.
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19910624001/t19910624001.html (2016.12.1閲覧)

【論文】

大学ゴルフ授業における ICT 活用の実態

浅井泰詞 (目白大学)・北 徹朗 (武蔵野美術大学)・
高橋宗良 (鎌倉女子大学)・橋口剛夫 (帝京科学大学)

Reality of ICT utilization on college golf class

Taishi ASAI (Mejiro Univ.), Tetsuro KITA (Musashino Art univ.),
Muneyoshi TAKAHASHI (Kamakura Women's Univ.),
Takeo HASHIGUCHI (Teikyo Univ. of Science)

概要

本研究は、ゴルフ授業担当者を対象として、大学でのゴルフ授業における ICT 活用の実態を調査検討することを目的とした。各大学のシラバスを検索しゴルフ授業担当教員に、スマートデバイス活用状況および視聴覚教材使用状況を調査した。その結果、34.3%がスマートデバイスを使用していることが明らかとなった。また、スマートデバイスおよび視聴覚教材は、授業数が多いほど使用率が高いことが明らかとなった。

キーワード：ゴルフ授業、ICT 活用、シラバス

【はじめに】

ゴルフは性別や年齢が異なる場合でも同時に楽しめる、人気の生涯スポーツの一つである。文部科学省の「体力・スポーツに関する世論調査」においても、「この1年間に行った運動・スポーツの種目」と「今後行ってみたい運動・スポーツの種目」の両方において、ウォーキング、体操、水泳、ライニングなどに続き、6番目に多い種目となっている(文部科学省, 2013)。

ゴルフはルールやマナーを重んじるスポーツであり、他者への配慮が必要なことから、大学教養体育においても、社会性の涵養の観点から多くの大学において体育授業として扱われている(北ら, 2016)。さらに、自然環境の中で行うスポーツとして、スキー等と同様に集中授業としても多くの大学で行われており、授業実践研究も多く報告されている(大澤, 1991)(村木, 1991)(佐渡, 1996)(伊藤, 1998)(伊藤, 2000)(中澤ら, 2002)(北ら, 2010)(北ら, 2013)

(北, 2014) (高橋ら, 2015) (高橋ら, 2016)。

ところで、近年教育分野にも ICT を活用した授業実践が増えてきており、体育分野においても特に実技指導において ICT の活用が増えてきている。ICT とは、「Information and Communication Technology」の略で、教育現場では、DVD などの映像、電子黒板やプレゼンテーションソフトなどがあげられる。体育の分野では、以前からスポーツの映像などを教材としてみることは多くあったが、特に近年は自分の映像を撮影し見ることが容易にできるようになってきている。それに伴い、ICT を活用した指導実践や授業研究に関する報告を頻繁に目にするようになってきた (高橋ら, 2003) (内山ら, 2008) (小澤ら, 2009) (北ら, 2010) (北, 2012) (市河ら, 2012) (田原ら, 2013)。

近年普及し始めた iPad をはじめとしたタブレット型端末では、カメラとモニターが一体化されており、軽量で扱いが容易であるため、様々な教場での利用が簡単に行えるようになってきた。また、スマートフォンなどの携帯電話端末も、小型ではあるもののカメラの性能も良く、十分な役割を担うことができるようになったことで、さらに簡易的に利用できるようになった。特に携帯電話端末においては、大学生のほぼ全員が所持していることもあり、準備にも負担がかからないという利点があり、授業にも活用しやすくなってきている。

そこで本研究では、ゴルフ授業担当者を

対象として、大学でのゴルフ授業における ICT 活用の実態を調査検討することを目的とした。

【方法】

【調査方法】

本研究では、大学のゴルフ授業担当者を対象に郵送法によるアンケート調査を実施した。全国の全4年生大学782校において、各大学のホームページに掲載されているシラバスを確認し、ゴルフ授業が開講されている大学を抽出した。当該授業担当教員581名にアンケート調査紙を送付し、そのうち、退職などの理由での返送分を除く、556名分を本調査の対象とした。その結果、170名からの回収が得られ、回収率は30.8%であった。そのうち、ICT 活用に関する有効回答数は166件であり、有効回収率は29.9%であった。調査期間は2014年10月24日～2015年2月28日であった。

【調査項目】

本研究での調査項目は、以下のものであった。

- ・授業担当者の基礎的情報
- ・授業の構成および形態
- ・スマートデバイス活用状況
- ・視聴覚教材使用状況

【結果】

1. 授業担当者の基礎的情報

大学ゴルフ授業担当教員の性別は、男性94.6%、女性5.4%であった。担当教員の年齢およびゴルフ授業歴を表1に示した。また、専門スポーツがゴルフである教員は全体の4.8%であった。

表1. ゴルフ授業担当教員の年齢およびゴルフ授業歴

	年齢 (age)	ゴルフ授業歴 (years)
平均値	53.2	14.8
標準偏差	10.9	10.5
最大値	71	40.0
最小値	26	0.5

2. スマートデバイス活用状況

大学ゴルフ授業における、iPadなどのタブレット型端末の使用割合は30.1%であった。また、スマートフォンなどの携帯電話端末の使用割合は15.7%であった。タブレット型端末と携帯電話端末の両方を使用している割合は11.4%、タブレット型端末のみ使用が18.7%、携帯電話端末のみ使用が4.2%で、全体の34.3%がいずれかのスマートデバイスを使用していた。使用していない割合は65.7%であった（図1）。自由記述での使用方法についての設問では、学生のスイングやフォームチェック、プロなどの映像との比較、初回授業と最終授業での上達度チェックなどに使用しているとの回答が多かった。そのほか、動作解析アプリケーションを用いて、ラインや角度などを書き込み、視覚的にわかりやすく解説を行っている例もあった。

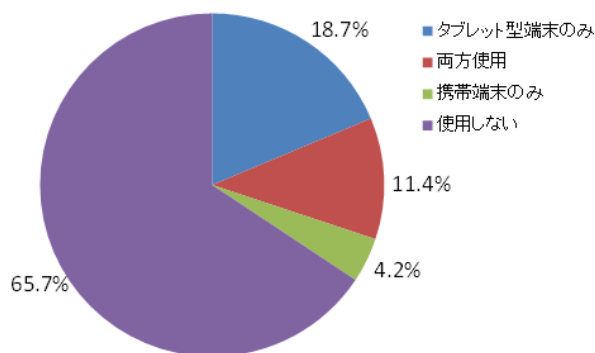


図1. スマートデバイス活用の割合

3. スマートデバイス活用者の年齢

スマートデバイス活用者の平均年齢では、「タブレット型端末と携帯電話端末の両方使用」が52.1歳、「タブレット型端末のみ使用」が50.9歳、「携帯電話端末のみ使用」が48.1歳、「両方使用しない」が54.2歳であった。全体では53.2歳であった（図2）。

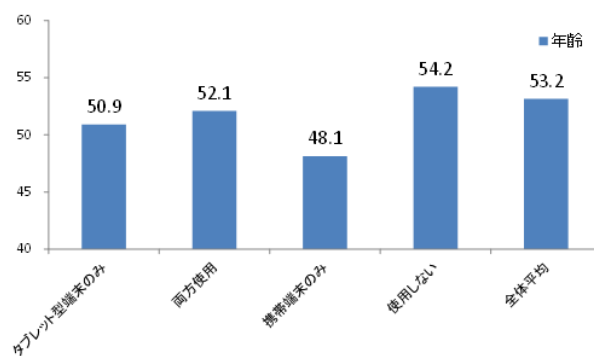


図2. スマートデバイス使用者の年齢

4. 視聴覚教材の使用状況

ゴルフ授業においてDVDや動画等の視聴覚教材の使用頻度は、「よく使用する」が5.5%、「時々使用する」が40.2%、「あまり使用しない」が28.0%、「全く使用しない」が26.2%であった（図3）。そのうち、「よく使用する」および「時々使用する」と回答した者を対象に、1コマあたりの使用時間を調査したところ、「10分程度」11.8%、「20分程度」26.5%、「30分程度」33.8%、「40分程度」10.3%、「50分程度」4.4%、「60分程度」7.4%、「その他」5.9%という結果が得られた（図4）。通常授業時にタブレット型端末や携帯電話端末で撮影しておいた映像を、雨天時の教室での教材として使用している例もみられた。

5. 授業形態とスマートデバイス活用状況

通常授業におけるタブレット型端末の使用割合は28.6%、携帯電話端末の使用割合は17.0%であった。集中授業におけるタブレット型端末の使用割合は24.1%、携帯電話端末の使用割合は3.4%であった。通常授業と集中授業の両方を行っている授業では、タブレット型端末の使用割合44.0%、携帯電話端末の使用割合は24.0%であった（図5）。

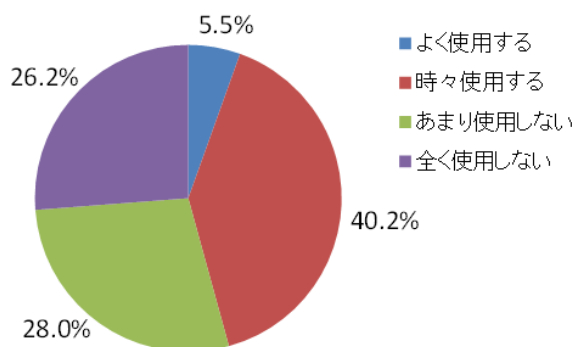


図3. 視聴覚教材の使用頻度

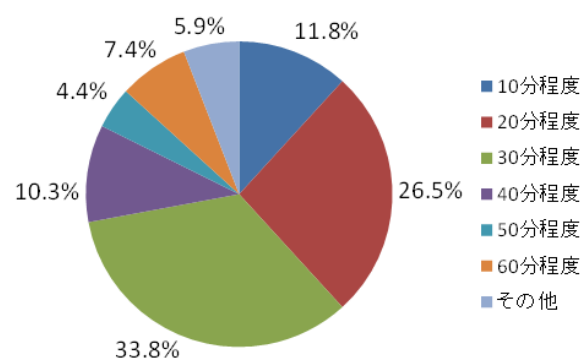


図4. 1コマあたりの使用時間

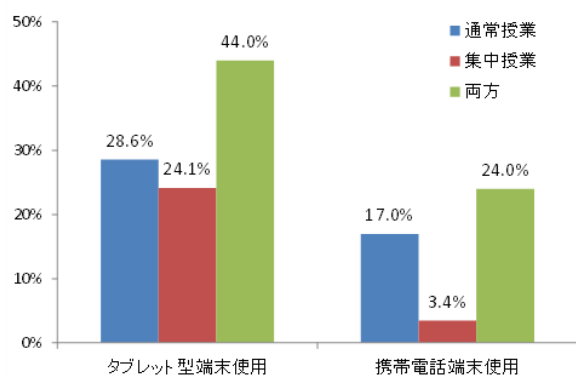


図5. 授業形態別スマートデバイス活用状況

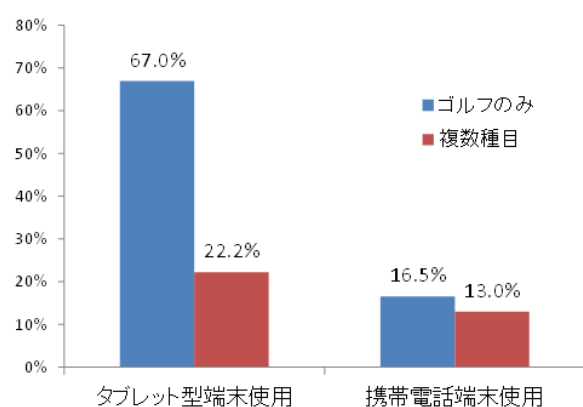


図6. 授業種目とスマートデバイス活用状況

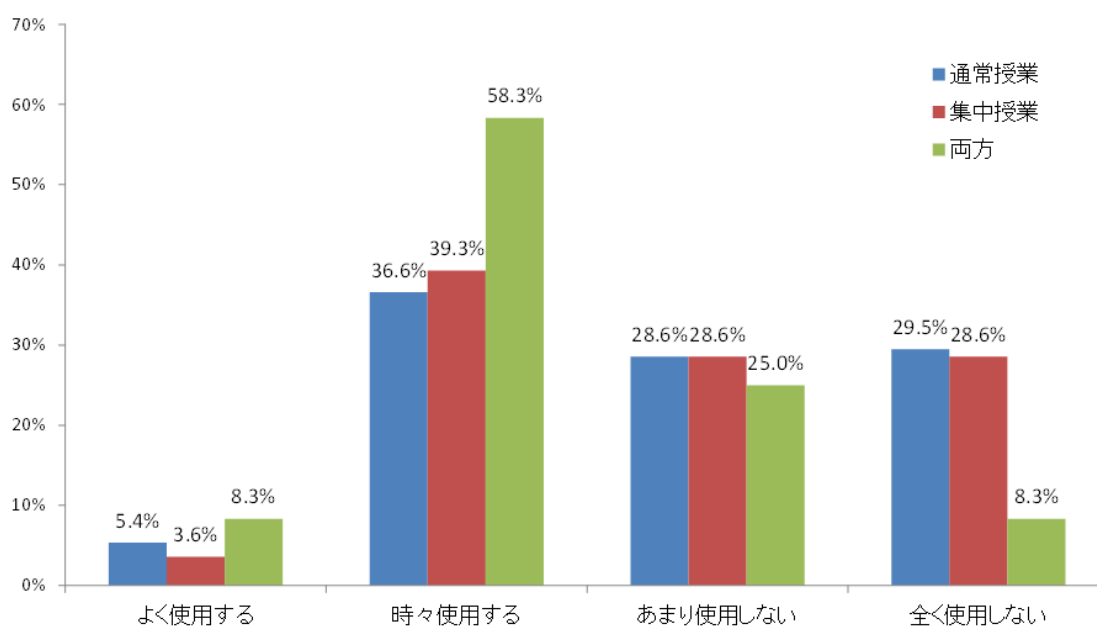


図7. 授業形態別の視聴覚教材使用頻度

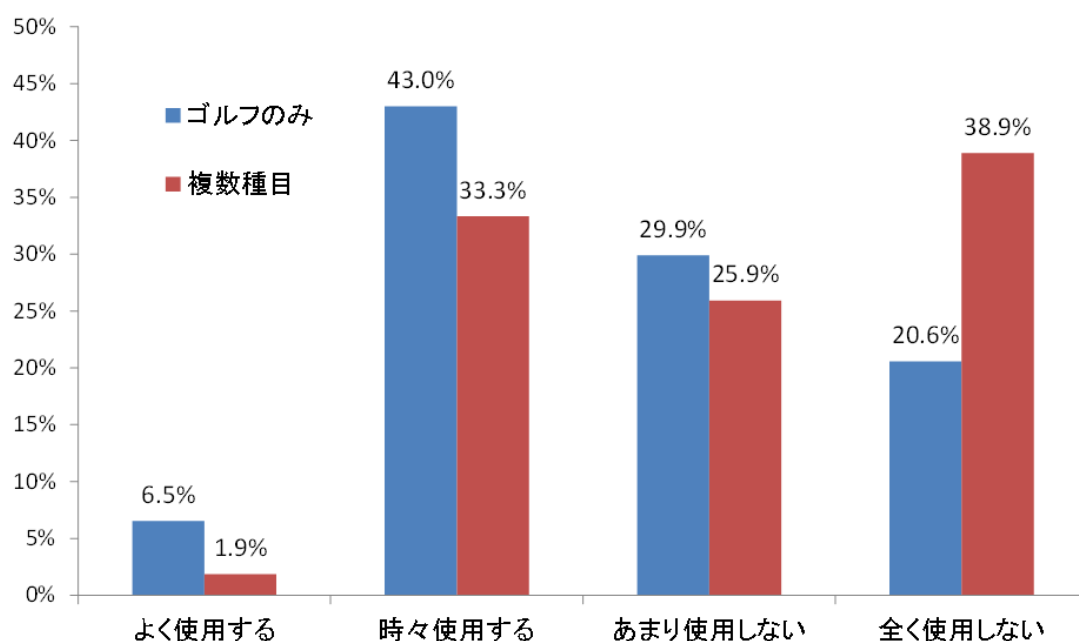


図8. 授業種目別の視聴覚教材使用頻度

ゴルフのみで開講されている授業でのタブレット型端末の使用割合は 67.0%、携帯電話端末の使用割合は 16.5%であった。複数種目で開講されている授業でのタブレット型端末の使用割合は 22.2%、携帯電話端末の使用割合は 13.0%であった（図6）。

6. 授業形態と視聴覚教材の使用状況

通常授業における視聴覚教材の使用頻度は、「よく使用する」が 5.4%、「時々使用する」が 36.6%、「あまり使用しない」が 28.6%、「全く使用しない」が 29.5%であった。集中授業においては、「よく使用する」が 3.6%、「時々使用する」が 39.3%、「あまり使用しない」が 28.6%、「全く使用しない」が 28.6%であった。通常授業と集中授業の両方を行っている授業では、「よく使用する」が 8.3%、「時々使用する」が 58.3%、「あまり使用しない」が 25.0%、「全く使用しない」が 8.3%であった（図7）。

ゴルフのみで開講されている授業での視

聴覚教材の使用頻度は、「よく使用する」が 6.5%、「時々使用する」が 43.0%、「あまり使用しない」が 29.9%、「全く使用しない」が 20.6%であった。複数種目で開講されている授業においては、「よく使用する」が 1.9%、「時々使用する」が 33.3%、「あまり使用しない」が 25.9%、「全く使用しない」が 38.9%であった（図8）。

7. その他、使用している ICT 機器

タブレット型端末、携帯電話端末のアプリケーション以外で、その他に使用している ICT 機器には、以下の機器があげられた。

- ・ゴルフシュミレーションマシン
- ・ディレイビデオシステム
- ・デジカメのスローモーション機能

【考察】

大学ゴルフ授業担当教員の性別は、9 割以上が男性教員であった。年齢としては 20 代から 70 代まで幅広くいるが、平均年齢は

53.2歳と高い傾向であった。ゴルフ授業歴も平均14.8年となっており、同じ教員が長い間ゴルフ授業を担当しているとみられ、新規にゴルフ授業を担当する教員が少ない現状が推察される。また、ゴルフが専門スポーツである教員は全体の4.8%となっており、専門外の教員が大半を占めることが明らかとなった。

大学ゴルフ授業におけるスマートデバイスの使用率は、34.3%であった。近年、文部科学省によって「教育の情報化に関する手引き」(文部科学省, 2010)や「教育の情報化ビジョン」(文部科学省, 2011)が公表されICTを活用した授業実践が増えてきているが、今回の調査では7割弱が活用しておらず、まだ大きく普及していない現状が明らかとなった。しかし、ゴルフのみで開講されている授業でのタブレット型端末の使用率は67.0%、複数種目で開講されている授業でのタブレット型端末の使用率は22.2%と、およそ3倍の差が示された。さらに、通常授業および集中授業それぞれで開講されている授業と両方開講されている授業では、両方開講されている授業の使用率が1.7倍高くなっており、ゴルフの授業数が多くなるほど使用率が高まる傾向が示された。スイングチェックなどにも多くの時間をかけられることが、このような結果になったと考えられる。今後はさらに使用率が高まることが期待される。

スマートデバイスの中では、多くがタブレット型端末を使用しており、授業での視聴覚教材としては画面が大きいことが重要であると考えられる。携帯電話端末は多くの学生が個人で保有しており、大学側で準備する必要がないというメリットはあげら

れるが、携帯電話端末のみを使用している割合は僅かであった。また、教員の年齢での使用率には大きな差異は見られなかった。

授業における視聴覚教材の使用頻度では、「時々使用する」との回答が多いことから、雨天時に教場が確保されていない授業においては、雨天時にDVD等の動画を視聴している例が多いことが推察される。また、通常授業時にスマートデバイスで撮影しておいた映像を雨天時の教室での教材として使用している例もみられ、このような使用方法は有効利用しているといえるであろう。しかし、「あまり使用しない」「まったく使用しない」との回答が50%を超えていることは、今後の課題であると考えられる。1コマあたりの使用時間では、20分~30分程度使用している割合が高かった。これは、授業前のスイングやルール等の確認での使用、もしくは撮影した動画をその場でフィードバックしていることが考えられ、多くの場合、概ね授業時間の3分の1程度の時間を使用していることが明らかとなった。授業形態別に見ても、スマートデバイスの使用率と同様に、ゴルフのみで開講されている授業が使用頻度においても高い結果となった。また、通常授業と集中授業の両方開講されている授業においては、それぞれで開講されている授業と比べ、視聴覚教材の使用頻度が高くなっており、「全く使用しない」と回答した割合は8.3%と少なくなっている。これらからも、授業数が多ければ視聴覚教材の使用頻度が高くなるといえるであろう。

【まとめ】

本研究は、ゴルフ授業担当者を対象とし

て、大学ゴルフ授業における ICT 活用の実態を調査検討した。その結果、34.3%がスマートデバイスを使用していることが明らかとなった。また、スマートデバイスおよび視聴覚教材は、授業数が多いほど使用率が高いことが明らかとなった。

なお、本研究の一部は、大学体育 No.107 において、報告された。

【文献】

1. 文部科学省 (2013) 体力・スポーツに関する世論調査. online from: http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2013/08/23/1338732_1.pdf
2. 北徹朗・橋口剛夫・高橋宗良・浅井泰詞 (2016) 大学ゴルフ授業における雨天時授業、安全対策、ICT 教材利用の実態調査. 大学体育 107: 106-112.
3. 大澤啓蔵 (1991) 大学ゴルフ授業履修者の実態調査: ゴルフ経験、履修動機、関心度、授業の感想. 亜細亜大学教養部紀要 43: 262-249.
4. 村木茂明 (1991) 酪農学園大学におけるゴルフ授業に関する調査研究-アンケート調査を通して-. 酪農学園大学紀要 人文・社会科学編 16: 15-19.
5. 佐渡清隆 (1996) 大学教育としての体育 第3報:北星学園大学正課体育実技「ゴルフ」の授業. 北星学園大学文学部北星論集 33: 119-136.
6. 伊藤文雄 (1998) ゴルフ授業の実態調査: 関西学院大学について. スポーツ科学・健康科学研究 1: 19-24.
7. 伊藤文雄 (2000) ゴルフ授業に対する学生の評価. 関西学院大学スポーツ科学・健康科学研究第 4: 1-6.
8. 中澤一成・大北文生・堀江繁・植田恭史・北徹朗 (2002) ゴルフ授業履修学生に対する意識調査—集中授業について—. 運動とスポーツの科学 8 (1): 93-98.
9. 北徹朗・吉原紳・大澤啓蔵・山本唯博 (2010) 本学商学部におけるゴルフ授業履修学生の実態調査. 体育研究 (中央大学) 44: 21-26.
10. 北徹朗・山本唯博 (2013) ゴルフ授業における教場環境の違いが学習効果とゴルフ継続意欲に及ぼす影響: 同一教員が担当した 5 大学における考察. 大学体育学 10(1): 61-70.
11. 北徹朗 (2014) 楽しいゴルフ授業づくりのテクニク—アプローチ指導の一例—. 大学体育 103: 50-51.
12. 高橋宗良・北徹朗・浅井泰詞・橋口剛夫 (2015) 大学ゴルフ授業の到達目標—中国地方の大学シラバスによる検討—. ゴルフ教育研究 1(1): 2-8.
13. 高橋宗良・北徹朗・橋口剛夫・浅井泰詞 (2016) 大学ゴルフ授業におけるインシデント事例分析. ゴルフ教育研究 2(1): 1-6.
14. 高橋仁大・児玉光雄 (2003) デジタル機器を活用したテニスの指導法に関する研究. 九州体育・スポーツ学会第 52 大会号 32.
15. 内山亮・小澤治夫・中西英敏 (2008) 柔道における映像遅延装置を用いた技術指導. 体育の科学 58(3): 180-184.
16. 小澤治夫・内山亮・中西英敏 (2009) 映像遅延装置を用いた体育授業にお

- ける運動指導についての研究. 東海大学起用体育学部 39: 117-121.
17. 北徹朗・山本唯博（2010）大学ソフトボール授業に適した視聴覚教材に関する調査. 大学体育学 7: 77-86.
 18. 北徹朗（2012）大学体育授業における ICT 活用授業の事例. 大学体育 100: 121-124.
 19. 市河大・長田朋之・今野晃一（2012）体育におけるタブレット型情報端末（iPad）の可能性. 教材学研究 23: 312.
 20. 田原亮二・北徹朗（2013）iPad を大学体育実技で使ってみよう. 大学体育 101: 99-101.
 21. 文部科学省（2010）教育の情報化に関する手引き. [on line] from <http://www2.japet.or.jp/info/mext/tebiki 2010.pdf>.
 22. 文部科学省（2011）教育の情報化ビジョン. [on line] from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/__icsFiles/afieldfile/2011/04/28/1305484_01_1.pdf.

資料

【資料】

『ゴルフスイング体操®』をおこなった受講生たちの感想
ーこの感想の集計結果から推測される
「大学ゴルフ授業」の課題と目標ー

松村公美子

[抄録]

【目的】 武庫川女子大学にて『ゴルフスイング体操®』による授業を受けた学生たちが、どのような効果を実感したかを調査し、この指導法を検証する。

【対象】 過去三年間に授業を受けた全受講生（394名）。

【方法】 アンケート結果を項目別に集計した。

【結果】 「肩に効く」と実感した受講生が最も多かった。以下「スイング動作が自然に身に付く」「スムーズに身体が動く」と続いた。

【考察】 「理解力に優れる」「動作習得が早い」と思われた。その反面、受講生たち（若年層）の「筋力や体力低下」も懸念された。

【結論】 短期間で受講生たちに「上手くなれた」「楽しい」と、いかに実感してもらえるかが大きな課題。また受講生の体力や筋力・運動習慣を鑑みて実施することが必要であると推測された。

キーワード：ゴルフ、ゴルフスイング、体操、エクササイズ、練習法、指導法、アンケート

【はじめに】

2016年8月18日に実施された「第4回 大学ゴルフ授業研究会」において、武庫川女子大学で『ゴルフ実技』を受講した学生たちから寄せられた『『ゴルフスイング体操®』をおこなってみての感想』を紹介した。こ

の感想は、15回の授業の終盤で、アンケート調査として実施している自由記述式のものである。

これらの感想を項目別に集計してみると、『ゴルフスイング体操®』の効果を、どのような場面で感じる人が多いかを調査することができると思ったため、過去3年間

松村：『ゴルフスイング体操®』をおこなった受講生たちの感想

に受講した学生たちの感想を再読し、研究会で、その結果を報告することにした。

また、受講生たちの感想から、大学でのゴルフ授業の課題も浮き彫りになるように感じられたため、併せて、その事柄についても発表した。

以下が、今回の研究会で述べた内容である。

【武庫川女子大学でのゴルフ実技】

武庫川女子大学にて実施している『ゴルフ実技』の特徴は下記の通りである。

- ・15回完結型（12～15回目の4回は、民間のゴルフ練習場を使用）
- ・共通教育科目のひとつ
- ・全学年、全学科の学生が選択出来る
- ・1クラス定員50名
- ・ゴルフ未経験者が多い（経験者は多くて1クラス4名程度）
- ・『ゴルフスイング体操®』を用いて実施

【アンケートの調査期間】

2013年後期～2016年度前期（過去3年間）

この間に『ゴルフ実技』を受講した全学生（394名）の感想を再読し集計した。

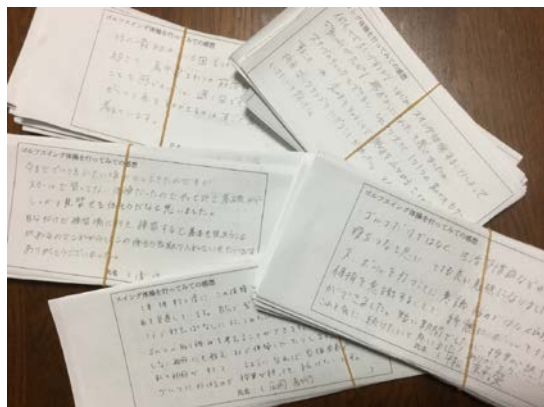


図1. 受講生たちが書いた感想

【アンケートの一例（原文のまま）】

「ゴルフスイングの仕方など、まったく知らなかったが、スイング体操を終えりとなぜかできるようになって、びっくりした。すごい効果的な体操だと思った。」

「初めてゴルフを経験して、基礎をかためるために、とても大切な体操だと思います。この体操をおこたった日は、あまり良いスイングができないと実感を何度もしました。これからも続けていきたいと思います！」

「肩甲骨の動きは、どのスポーツをするにしても大切であるのだということが分かりました。

肩甲骨や肩まわりがよく動いているのが分かるし、ソフトボールやハンドボールなどの準備体操に取り入れても効果的だった。」

「最初、ゴルフスイング体操をやるだけで、本当にボールに当たりやすくなったり、飛距離が伸びるのだろうか...?と思いました。が、実際にやってみると、ボールに当たる確率が上がったり、きれいにスイングできた時は、より遠くまで飛んだので感動しました。

肩こりなどの身体のほぐれにもなり、健康面でも良い影響があるのかなと思いました。」

「体操をしてみなければわからない肩甲骨の動きや手首の動きなどがあったので、とても効果的でした。

ゴルフ初心者の私としては、スイングの形もよくわからない状態からのスタートだった。

たので、この体操でスイングの形もわかり、クラブをもったときも自然なスイングができました。」

【アンケートの集計方法】

記述式で、項目別に○印やレ点を入れる方法ではないので、書いている言葉のニュアンスを拾って行く方法で集計をおこなった。

例えば、下記のように記述してある場合は下線の言葉を拾った。

「あの体操を打つ前に軽くやるとすごく飛ぶのでびっくりしました。

あと、あの体操をするとすごく肩甲骨が動くのですごく気持ち良くて眠たくなるくらいすっきりします。

でも、運動ができない私でも難しいと感じることがないので、だれでもできるすごい素敵な体操だと思います。

家族にも教えました。

ゴルフをしなくなっても気持ちいいのでたまにやろうと思います。」

- ・すごく飛ぶ…飛距離アップ
- ・肩甲骨が動くのですっきりする…肩のエクササイズとしての効果を実感
- ・素敵な体操、ゴルフをしなくなっても気持ちいいのでたまにやろうと思います…エクササイズとして良いとの評価
- ・家族にも教えた…家族や友人にも教えたエクササイズ

「体操をしてみなければわからない肩甲骨の動きや手首の動きなどがあったので、とても効果的でした。

ゴルフ初心者の私としては、スイングの形もよくわからない状態からのスタートだったので、この体操でスイングの形もわかり、クラブをもったときも自然なスイングができました。」

・効果的…ゴルフスイングを覚えるのに役立つ

・スイングの形も分かり…ゴルフスイングの動きが理解しやすい。

・自然なスイングができた…実際のショットの時に身体が動きやすかった。

記述式のアンケートのため、上記のように、一人で複数項目の効果や感想を挙げる受講生が多かった。

【項目別に分類】

これらのアンケート結果を集計してみると、受講生たちの記述は、大別して下記の4項目に分類できると考えた。

1. ゴルフスイング体操⇔ゴルフスイングの動作作り

ゴルフスイングの動作づくりに関連しての項目

2. ゴルフスイング体操⇔エクササイズ

ゴルフスイング体操をエクササイズとして捉えた項目

3. ゴルフスイング体操⇔実際のショット

実際にボールを打った時に感じた効果に関連する項目

4. ゴルフスイング体操⇔今後の活用法

今後の活用法についての項目

受講生の感想を上記の4項目に大別して集計した結果を次に述べる。

【1. ゴルフスイング体操⇔ゴルフスイングの動作作り】

・ゴルフスイングの動作が自然に身に付く（身体での理解）

＊いつの間にかゴルフスイングの動作になっていて驚いた。スイングの動作が覚えやすくて効果的。きれいなフォームが身に付く体操だと感じた。など

116名

・ゴルフスイングの動作が分かりやすい（頭での理解）

＊スイングの動きが理解できた。基本の動作を学べた。大切な体操だと思った。クラブの通り道が分かりやすい。など

58名

ゴルフスイングのイメージトレーニングになる（イメージでの理解）

＊イメージトレーニングができた。イメージトレーニングになった。など

18名

合計 192名

192名/394名（48.7%）

【2. ゴルフスイング体操⇔エクササイズ】

・肩に効くエクササイズ

＊肩甲骨の可動域が広がった。肩こりが解

消した、緩和した。肩が軽くなった。など
124名

・全身に効くエクササイズ

＊全身がスッキリした。身長が伸びたような感じがした。普段使わない筋肉が伸びた。姿勢が良くなると感じた。など

75名

・エクササイズ自体が楽しい

＊楽しくおこなえる。体操が好き。日頃からもやるようになった。友達と盛り上がってできるダンスみたいな体操。など

52名

・他の競技にも役立つエクササイズ

＊自分の競技でも役立った。競技成績が良くなった。など

10名

・腰に効くエクササイズ

＊腰痛が緩和した。腰がスッキリした。など

7名

合計 268名

268名/394名（68.0%）

身体の中のどの部位に効く体操だと感じたかについて、部位別に集計すると、受講生の場合は、肩（60%）、全身（37%）、腰（3%）であった。

これを以前に一般のゴルファー（年代層は様々）に対しておこなったアンケートと比較してみた。

一般のゴルファーの場合は、肩（45%）、

全身（37%）、腰（18%）であった。

この「身体のどの部位に効いたと思うか」の比率を見た限り、肩こりに悩む受講生は非常に多いが、腰に痛みや張りを感じている人は、一般のゴルファーよりも少ないのではと推測された。

逆に、一般ゴルファーの「腰に効く」との回答は、年齢によるものなのかゴルフ歴の長さによるものなのかは定かでないが、腰部に痛みや張りを感じているゴルファーは多いと推測された。

図2. 受講生の比率

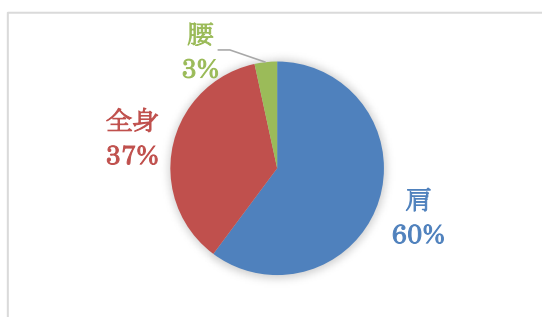
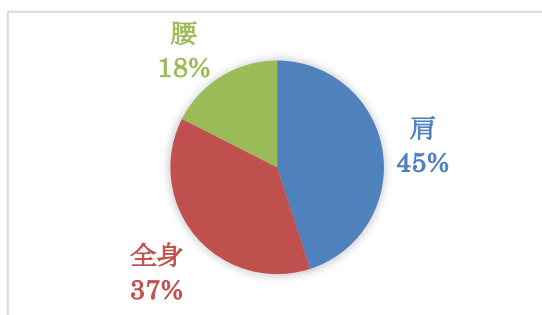


図3. 一般ゴルファーの比率



【3. ゴルフスイング体操⇔実際のショット】

・スイング時にスムーズに身体が動いた

＊打ちやすかった。いきなりクラブを持って振るよりもスムーズに身体が動いた。実際のスイングの時にゴルフスイング体操が

役立った。など

90名

・飛距離アップ

＊飛距離が伸びた。よく飛ぶようになった。など

68名

・即効性があり調子回復に役立つ

＊体操をした時と体操をしなかった時とでは差が出る。その差を痛感した。調子が悪くなった時にもう一回おこなうと、また当たるようになる。など

55名

・ミート率のアップ

＊よく当たるようになった。当たる確率が上がった。など

48名

・直進性の向上

＊真っ直ぐ飛ぶようになった。真っ直ぐ飛ぶ確率が上がった。など

37名

合計 298名

298名/394名（75.6%）

【ゴルフスイング体操の効果を実感する時…一般ゴルファーとの比較】

項目別到大別した4項目のうち、ここまでの3項目についても、一般のゴルファーと比較した。

1. ゴルフスイング体操⇔ゴルフスイングの動作作り

＊効果を感じた人の割合

受講生…48.7%

一般ゴルファー…75.5%

2. ゴルフスイング体操⇔エクササイズ

＊効果を感じた人の割合

受講生…68.0%

一般ゴルファー…73.3%

3. ゴルフスイング体操⇔実際のショット

＊効果を感じた人の割合

受講生…75.6%

一般ゴルファー…42.2%

図4. ゴルフスイング体操の効果を実感する時（学生と一般の比較）



この比較から、ゴルフ初心者の多い受講生の場合、ゴルフスイングを理論的に理解するというよりも、実際にボールを打った時に効果を実感する人の割合が多いと分かる。

逆に、一般ゴルファーの場合は、理論的に理解できたと感じる人は多いものの、実際のショットの時の効果をアンケートに記入する人は、受講生に比べて少なかった。一般ゴルファーからのアンケートは、拙著を読んでいただいた後におこなったものであることにも関係するかもしれないが、この差を見る限り、動作習得や上達のスピードにおいて、受講生たちは一般ゴルファーよりも早いのではないかと思われた。

【4. ゴルフスイング体操⇔今後の活用法】

・自分のゴルフの練習に取り入れる

＊ゴルフスイング体操をしながらゴルフの練習を続ける。これからゴルフをする機会があればゴルフスイング体操を用いる。など

35名

・日常のエクササイズに取り入れる

＊日頃からもおこなおうと思う。肩こりに効くので普段からもおこなおうと思う。など

24名

・家族や友人にも教えたいエクササイズ

＊ゴルフをする家族に教えた。肩こりに悩む家族にも教えたい。友達にゴルフの動きを教える時に使える。など

15名

合計 74名

74名/394名（18.7%）

【アンケート集計 全体の順位】

アンケートを集計してみて、項目別に付けない順位としては、下記の通りであった。

1. 肩に効くエクササイズ…124名
2. スイングの動作が自然に身に付く…116名
3. スイング時にスムーズに身体が動く…90名
4. 全身に効くエクササイズ…75名
5. 飛距離が伸びた…68名
6. ゴルフスイングの動作が分かりやすい…

58名

7. 即効性があり調子回復に役立つ…55名

8. エクササイズ自体が楽しい…52名

9. ミート率のアップ…48名

10. 直進性の向上…37名

11. 自分のゴルフの練習に取り入れる…35名

12. 日常のエクササイズに取り入れる…24名

13. ゴルフスイングのイメージトレーニングになる…18名

14. 家族や友人にも教えたいエクササイズ…15名

15. 他の競技にも役立つエクササイズ…10名

16. 腰に効くエクササイズ…7名

【小意見】

感想を集計していて、少し気になったのは、エクササイズ実施後に「筋肉痛になった」「（エクササイズが）ハードだった。疲れた」などと答えている受講生が30名いたことである。全受講生の約7.6%にあたる人数であるが、後期高齢者を含む一般ゴルファーのアンケートを見ても、このように回答する人はいなかったため、これは、受講生たちの「体力不足」や「運動習慣の減少」を感じさせるものではないかと思われた。

また、「体操の時間が長い」と答える受講生が3名いた。「ボールを打つ前に十分に身体をほぐす」、「ゴルフスイングの動作をしっかりと練習する」ことは、安全性の向上や上達の進捗度合いを早めるものとして必要であるが、90分間の授業時間を考えると体操の時間は10分以内に短縮した方が良いように思われたため、その後、改善し

た。改善後、「体操の時間が長い」と回答する受講生はいなくなった。

【受講終了後もゴルフの練習を続ける可能性】

今年の6月末にGMAC、PGAと大学ゴルフ授業研究会との間での三者連携調印式が執り行われた。このことによって、当大学ゴルフ授業研究会は、授業のみならず日本のゴルフ界においても、その役割や責任は大きなものになっていくと思われる。

そこで、大学でゴルフの授業を受けた学生たちが、将来もゴルフを続けたいとの意思が有るかどうかについてもアンケートを通じて調査してみた。

・ゴルフが（授業が）楽しかった。

＊ゴルフの楽しさに気づいた。ボールを打つのが楽しかった。など

73名

・自分のゴルフの練習に取り入れる

＊ゴルフスイング体操をしながらゴルフの練習を続ける。これからゴルフをする機会があればゴルフスイング体操を用いる。など

35名

・この授業を受けたことを機会に、これからもゴルフをしていきたい。

＊父と一緒にゴルフができたと思う。友達と、また練習場に行ってみます。など

20名

合計128名

128名/394名（32.4%）

「ゴルフが楽しかった」「授業が楽しかった」と回答した受講生は、今後、機会に恵まれればゴルフに親しんでくれるのではないかと思われるため、希望的予測のもと、この項目にカウントした。

ただ、ゴルフの練習の継続を明記した受講生は、「自分のゴルフの練習に取り入れる」と回答した35名と、「この授業を受けたことを機会に、これからもゴルフをしていきたい」と回答した20名の計55名（全体の約13%）であった。このことは、『ゴルフ実技』を選択したものの、その理由は、ゴルフに対する強い興味や関心よりも、他に何らかの理由が有ってのこのように思われる。他の何らかの理由として挙げられることは、「あまり汗をかきそうにない軽運動だから」「運動の強度としては低そうだから」「これまでにやったことがないスポーツのため、少しやってみたいと思った」「友達が選択したので一緒に選択した」などではないかと思われる。

また、「授業が終わっても、ゴルフの練習をしたいと思いますか？」の私の口頭での問いに「ゴルフってお金がかかりそうですね」「プレーフィーが高い」「クラブも（値段が）高い」「将来、する機会はあるかもしれないけど、今すぐは無理」と、その敷居の高さを口にする受講生も少なからずいる。

受講生たちが感じている、この敷居の高さを、少しでも低くするには『Gちゃれ』等、廉価でゴルフを楽しめる機会を作ることが最適であると思われる。

大学でゴルフ実技の授業を受けた学生たちが将来のゴルファーに移行していくため

には、授業受講以降も、ゴルフの練習を継続しやすい環境づくりが必要であろう。

【受講生たちの特徴として挙げられること】

アンケートの集計結果と一般ゴルファーとの比較から、受講生たちの特徴としては、次のような事項が挙げられる。

- ・理解力に優れる
- ・動作習得が早い
- ・上達が早い
- ・受講生の筋力低下・体力低下
- ・受講生の運動不足

授業の一環としての認識と、成績がつくとの意識があるからか、受講生たちのゴルフに取り組む姿勢は、素直である。また、20歳前後の若者のゴルフスイングの動作の呑み込みは早い。さらに、他の競技をおこなっている等で、筋力的に優れる受講生たちの上達のスピードには目を見張る。

一方で、「肩こりが治った。肩が軽くなった」との感想が非常に多かったことや、「『ゴルフスイング体操®』をハードだと感じる」との感想は、受講生たちの運動不足と、現在、問題視されている若年層の筋力不足や体力の低下を懸念させるものであった。

【ゴルフ経験者の感想】

少人数ではあるが、ゴルフ経験者の感想は、指導界や大学で実施される授業の課題となるように感じられたため、今回の発表時に紹介した。

「自然とテイクバックの位置まで手があが

る。腰が自然と動く。昔はボールから目をはなさない色々なコトをガチガチに考えながら打とうとしていて、もちろんきれいにあたる事はありませんでした。でも今は、あまり何も考えないで体がスムーズに動きます。びっくりしています。」

「今まで体の使い方を無視してスイングしてたので、終わった後の疲れなどがひどかったし、スコアもなかなかのびませんでした。でも、この授業で学んだ体の使い方を考えながらのゴルフは全然違うものでした。これからも使っていきたいと思います。」

「高校の時にゴルフがあったのですが、その時と違いゴルフ体操をするようになってからは動きもスムーズになり、きれいな動きをつくれるようになりました。より遠くに飛ばせるようになったので、ゴルフが楽しくなりました。ありがとうございました。」

「私はゴルフをはじめた時スイングを体に覚えさせるのに、とても苦労しました。理屈とくり返しで長い時間かけて覚えたので、それが手軽に出来る体操で学べるのなら早くに知っておきたかったなと思いました。この授業を受けて、1年休んでいたゴルフをもう一度はじめたいと思い、またやりはじめました。本当に楽しかったです。ありがとうございました。」

「中学生くらいまで父親に打ちっぱなし場に連れて行ってもらっていて、高校に入り、久しぶりにゴルフをした時、肩がとても痛かったことを覚えています。しかし今回久しぶりにゴルフをしたにも関わらず、肩な

どが痛くなることがなかったです。これからも、ゴルフをする時や、それ以外の時も、この体操をしていきたいと思います。」

これらの感想を読むと、胸が痛むようにも感じられ、現在、様々な指導の現場において、どのような理論に基づいた、どのような指導がおこなわれているのかを調査してみる必要が有るように思われた。

特に「長い年月をかけて練習をしても、なかなか上手くならなかった」や「ゴルフの練習をしていて身体を痛めた」との経験は、練習のモチベーションを低下させるため、学術的見解に基づいた上で、改善すべき指導法があれば、安全性考慮の面からも、改善を促したいものである。こういったことも、大学ゴルフ授業研究会の役割りとなるように思われる。

【大学ゴルフ授業研究会の課題】

受講生たちの感想を読んでも、「上手くならなかった」「飛ばなかった」「当たらなかった」「難しい」「身体が痛い、身体を痛めた」などの感覚や経験は、「やめる」「中断する」に繋がるのが分かる。これを、「上手くなれたと実感できた」「飛んだ」「当たった」「自分にもできる」「身体がスッキリする」に指導法を転換できると、受講生たちの「練習したい」「続けたい」との意欲に繋がるのではないだろうか。

そこで、大学ゴルフ授業研究会の課題として挙げられることは、次のような事柄ではないかと思われた。

- ・受講生たちが「楽しい」「練習したい」「続けたい」「自分にもできそう」「簡単」と思える練習法の開発と伝達
- ・短期間でゴルフスイングの身体の動きが身に付く練習法の開発と伝達
- ・受講生（若年層）の体力低下・筋力低下を鑑みて、体育の授業としての役割りを果たせる授業とする

上記の3つに関しては、私自身も、大学でのゴルフの授業を受け持った時に、必要と思った課題でもある。

大学でゴルフの授業を受けた学生たちが、将来のゴルファーに移行するためには、「これからも練習したい」「続けたい」との気持ちが残るような指導を心掛けたいものである。

【機能解剖学に基づくゴルフ指導を】

ゴルフは全身の筋肉の繋がりを良くすることによって、自身のスイングを改善・向上させて行けるスポーツである。

このことは、スイング作りの段階で、人間の身体の仕組みを教示する良い機会にもなる。

特にゴルフ未経験者の多い大学の授業の現場では、スイング作りが授業の核にもなるため、この核となる部分の動きのことは、人体の仕組みを理解することと併せて指導しておきたいものである。

また、ゴルフスイングは「より遠くへ、より正確に」ボールを飛ばせるほど良い。「より遠くへ」に関しては、筋出力の効率性と、身体を壊さないように使うための筋

出力の安全性、「より正確に」は身体（関節）の動きの安定性が必要である。

筋出力の効率性と安全性、動きの安定性を向上させるには、「機能解剖学で定義される人体の骨格の分割(図5)」と、「筋出力の向きは体幹→末端が原則(図6)」の両方が兼ね備わったスイングを指導者側でプログラミングし、それを受講生に指導して行くことである。

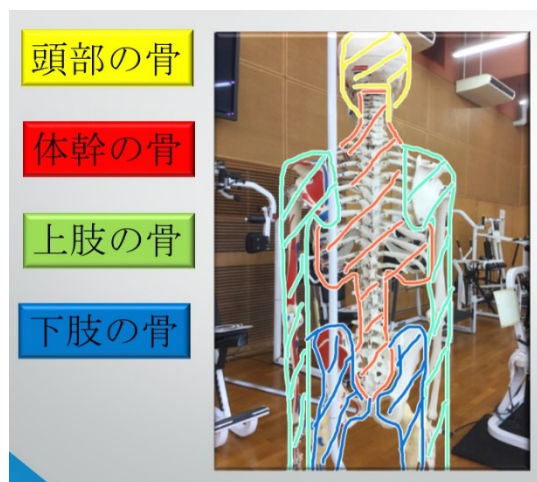


図5. 機能解剖学で定義される人体の骨格の分割

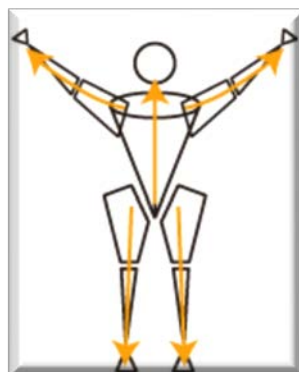


図6. 筋出力の向きを現す矢印

【全大学で実施を検討される授業へ】

ゴルフスイングは、老若男女を問わず、

それまでのスポーツ経験の有無を問わず、誰にでもおこなえる基礎的な身体の動きで構成できる。競技特性としても体格等の関係しない個人競技であるため、大学で授業を実施するにも、全学部・全学科の学生が取り組みやすいスポーツ科目であろうと思われる。

ゴルフスイングに必要な肩甲胸郭関節等の可動性向上は、肩こり解消や姿勢改善等にも繋がる。

また、ゴルフスイングを学ぶ際に人体の仕組みに関する知識も教示することができれば、その知識は他の競技をおこなう際にも役立つはずである。

これら『ゴルフ実技』を授業としておこなうことによつての有益な点をアピールできれば、現在はゴルフの授業をおこなっていない大学も実施を検討してくれるかもしれない。

GMAC や PGA との三者連携は、大学ゴルフ授業に対する期待の現れである。

この期待に沿うには、大学で実施される『ゴルフ実技』の授業内容を充実させて、認知され、「全大学で実施を検討される授業へ」と発展させて行くことではないかと思われる。

大学ゴルフ授業研究会は、若年層のゴルフファ－育成はもとより、指導法を学術的に検証・構成し、それを広く開示していくことでゴルフ界に貢献したいものである。

[文献]

* ゴルフスイング体操（株式会社ベースポ

ール・マガジン社発行、著者：松村公美子）

* ゴルフの授業実践 体育授業としてのゴルフ（株式会社三恵社発行、大学ゴルフ授業研究会編）

『ゴルフの安全チェックリスト』の作成について

橋口剛夫(帝京科学大学)

ゴルフ授業において、事故の発生を未然に防ぐ安全対策や安全管理は極めて重要な課題である。そのため指導者による安全指導やルール徹底、環境整備などが重要となるが、特に用具については事前の安全確認、スイングや打球方向など周囲への配慮は必須事項といえる。

2016年9月、大学ゴルフ授業研究会の「世話人」を対象に、授業中に経験したことのあつたヒヤリハット事例を収集した。クラブが振ったときに手からすり抜けて飛んだことがあつたと全員が回答した。原因の一つはグリップがツルツルだつたこと、他に素手でスイングしたからとの回答もあつた。クラブシャフトやヘッドが折れてしまい、その結果大けがをしたとの回答もあつた。隣との打席間隔が狭く、クラブやボールが当たりそうになつたとの回答もみられた。全体としては古いクラブや摩耗したグリップを、メンテナンスもしないまま使用しているケースでのヒヤリハット発生が多かつた。前後するが、一般社団法人日本ゴルフ用品協会(JGGA)のご協力により、『ゴルフクラブ事前点検内容』をご提供いただいた(資料あり)。ゴルフクラブの使用に際し、クラブヘッドやシャフト、グリップ、周囲などへの安全を確認するための詳細が記載されている。いずれの項目も重要と思われるが、分量的にやや多く、点検作業に手間取る印象があつた。

そこで2016年10月、ゴルフを安全に実施するために必要な点検内容について、ヒヤリハット事例と『ゴルフクラブ事前点検内容』(JGGA)との摺合せを行い、簡易に安全点検するための「チェックリスト」を共同で作成するに至つた。作成に当たってはJGGA専務理事の蓋孝氏の全面的なご協力をいただいた。最終的に2016年11月中旬、「ゴルフの安全チェックリスト」(一般社団法人日本ゴルフ用品協会 監修)は完成した。

ボールを打つ前とボールを打っている時のチェック項目が明確になり、ゴルフ授業においてより安全に配慮した取り組みができると期待している。今後、大学ゴルフ授業研究会を中心に、このチェックリストの普及を促していきたいと考える。

ゴルフの安全チェックリスト

（一社）日本ゴルフ用品協会 監修

チェック項目のうち、当てはまらない項目については、ゴルフクラブの使用を中止し、クラブの廃棄または交換、修理が必要です。次ページの該当番号で確認してください。

ボールを打つ前に＜ゴルフクラブ編＞

ウッドクラブのヘッド

- ☐ 表面に亀裂がない . . . ①
- ☐ 中で音がしない
- ☐ ヘッドに凹みがない

スティー爾（金属製）シャフト

- ☐ 錆びていない（表面の黒または茶色のスポット状のものは錆びです） . . . ②
- ☐ 歪みや曲がりがない

カーボングラファイト製シャフト

- ☐ 表面にキズや擦れがない . . . ③

ソケット（フェルール）：ネック上部にあるシャフトとのつながり部

- ☐ 隙間や緩み、割れがない . . . ④

グリップ

- ☐ ひび割れや摩耗がない . . . ⑤

ボールを打つ前に＜スイング編＞

ゴルフクラブの適正

- ☐ 自分の性、体力、年齢にマッチしたクラブである . . . ⑥
- ☐ 自分の技量にマッチしたクラブである

周囲の安全確認

- ☐ 人、樹木、建造物に触れない場所である . . . ⑦
- ☐ 道路、公園、人通りのない場所である

ボールを打っている時の確認編

インパクト時に強いダフリをした

ヒールやネックでショットした

石や樹木、金属など衝撃を受けた

- ☐ クラブのヘッド・シャフトの異常を確認している . . . ⑧

グリップ

- ☐ 必要に応じてグローブをしている . . . ⑨

「ゴルフの安全チェックリスト」

当てはまらない項目は、以下の理由によりゴルフクラブの使用を中止し、クラブの廃棄または交換、修理が必要になります。

- ① ヘッドの割れにつながる
- ② 表面にある黒または茶色のスポット状の錆び、
歪みや曲がりやシャフトの折れにつながる
- ③ シャフトの折れにつながる
- ④ シャフトの折れにつながる
- ⑤ クラブが手から滑り抜けて危険である
- ⑥ クラブの破損やけがの原因になる
- ⑦ 人に当たると死亡やけがの原因になる
- ⑧ シャフトの折れにつながる けがの原因になる
- ⑨ クラブが手から滑り抜けて危険である

ゴルフクラブ事前点検内容

（一社）日本ゴルフ用品協会 作成

使用される前に、以下の点を必ずチェックしてください。

◇自分にマッチしたクラブの使用

力が強く、体力のある方がシニア向け、レディース用やジュニア用のクラブを使用すると、破損し、けがの原因になることがあります。自分の体力や技量にマッチしたクラブを使用してください。

◇スイング時は周囲の安全を必ず確認

スイングする場合は、人、樹木、建造物などに触れないよう、周囲の安全を必ず確認してください。人に当たると死亡やけがの原因になります。

また、道路や公園など、人通りのある場所では絶対に使用しないでください。

◇強い打撃の後は必ずチェック

インパクト時に、強いダフリ（地面への打撃）をしたときは、ネック部やシャフトに異常がないか必ず点検してください。そのまま使用するとシャフトが折れて、けがの原因になることがあります。

また、スイング時にシャフトが肩、背中などに当たり、過度な力を集中させるとシャフト折れを引き起こすことがありますのでご注意ください。樹木や建造物、石や金属などで衝撃を受けた場合も、必ず点検してください。

①クラブヘッド

ウッドクラブについては、表面に亀裂が入っていたり、中でカラカラと音がすることがないかチェックしてください。もしあれば、使用を中止してください。

ヘッドに凹み等がある場合についても、ヘッドの割れにつながる恐れがありますのでご注意ください。

②シャフト

◎金属製のシャフト

金属製シャフトは錆びるとやがて折れます。錆びは、シャフトの内面で浸食します。

内面は見ることはできませんが、浸食が進むと表面にスポット状に錆びが現れます。

表面に黒い（または茶色い）点々が見られるようになったら使用を中止してください。

スチールシャフトにおいて、歪みや曲がりがないかご確認ください。

スチールシャフトにおいて、グリップ交換で抜くことがある場合はシャフト内側に錆が発生しているか確認をし、錆が発生している場合は強度が弱くなっていることがありますので使用を中止してください。

◎カーボングラファイト製のシャフト

カーボングラファイト製のシャフトは錆びませんが、金属製のシャフトより折れやすい

構造になっています。

クラブどうしが当たったり擦れたり、または何かにぶつけることで表面に小さなキズが入ると、振った時にキズに力が集中して折れることがあります。小さなキズがないかチェックしてください。もしあれば、使用を中止してください。

また、女性用のシャフトを男性が使うことはしないでください。

女性用のシャフトは柔らかい構造になっていますので、腕力が強い男性が使うと新品でも折れてしまうことがあります。

◎フェルルール

ネック部に装着されているフェルルールパーツに隙間や緩みが発生している場合にはシャフト折損につながる危険性がありますので、使用は控えて下さい。（修理して下さい）

◎ネックの打撃は破損の原因

極端なヒールショットやネック打ちは、シャフトやヘッドが破損する原因になることがあります。

特に、金属ヘッドのネック打ちは、ネック部の曲がりやシャフト折れの原因となります。

◎シャフトの折れ口は、けがに注意

シャフトが破損した場合は、折れ口には絶対に触れないでください。

切りキズや刺しキズを負う危険があります。

特に、カーボンシャフトの繊維は、刺さりやすいので注意してください。

破損箇所はテープや布などで保護し、シャフトを早めに取り替えてください。

③グリップ

グリップはゴムでできており、使用しているうちに表面が摩耗してきてやがてツルツルになります。

ツルツルになると、振った時にスベってクラブが飛んでいってしまいます。

ツルツルになったら使用を中止して、グリップを交換してください。

グリップ寿命の目安は「週に1度の練習と月に2度のラウンドで1年間」程度と見ておいてください。

◎消耗したグリップは早めに交換

表面がツルツルになったり、スリ減ったり、ヒビ割れたグリップは必ず取り替えてください。

スイング中、クラブが手から滑り抜けて、人に当たる危険があります。

また、異常を感じた場合は、早めに取り替えてください。

【その他】

ゴルフの学校教育への参入を目指す産業界とそのために必要なこと

北 徹朗（武蔵野美術大学）

31

【はじめに】

大学の教養体育として開講されるゴルフ授業が産業界から注目されている。これは、ジュニアに投資するよりも効率的な「大学生」であることに加え、現状として延べ約580大学を超えるゴルフ授業開講という市場の大きさのためである。

大学側から見ても、大学ゴルフ授業研究会が従来から指摘しているように、教場、用具、指導者、指導内容・方法など、教育環境改善課題が多いため、2016年6月27日の3者連携協定（大体連・PGA・GMCの産学共同）が結ばれ、上記の課題改善が始まっている。

大学はユニバーサル化時代を迎え、近年では「高大接続」に関する話題をよく耳にするようになった。ゴルフの場合は、大半の学生が初めてのスポーツとして大学体育授業で経験する。高等学校の学習指導要領には、球技の中に「ターゲット型」としてゴルフを扱うように謳われているが、これは体育の専門課程を有する高校に限られた内容である。

ゴルフ産業界では、次なる目標として「学校体育」（小中高）へのゴルフの正課での導入を目指すための議論がされ始めている。産業界からの後押しで教材として採用が増え、教材研究が増え、教育的価値や指導法が蓄積されることにより、学習指導要領に記載に至る前例はあるが、本稿では学校教育への参入を目指す産業界と最低限必要なことに関する話題を例示し、大学体育教員が担うことが可能な部分の相互理解を深めるための基礎情報を共有したい。

【学習指導要領に「ゴルフ」を入れたい産業界】

2016年の夏頃から、次期学習指導要領の改訂に合わせて「ゴルフ」が広く体育授業で行われるように働きかけよう、といった主旨の話題が、ゴルフサミット会議やゴルフ市場活性化委員会などでも散見されるようになった。

筆者は大学に身を置く立場から、学習指導要領に関する基本的な情報を提供をしてきた。2015年に文部科学省より示された「次期学習指導要領改訂に関する今後のスケジュール」では、

●2015年10月～：教育課程企画特別部会論点整理（2015年8月26日）の方向に沿って学校段階等別・教科等別にワーキンググループ等を設置し専門的に検討。2015年度末から年度明けを目処にとりまとめ。

●2015年内～年明け：小学校の授業時数の在り方について一定の結論

●2016年：教育課程部会又は教育課程企画特別部会における議論を踏まえて、審議のまとめ

●2016年度内：中央教育審議会として答申とされ、小中学校は2018年度からの先行実施、高等学校は2019年からの、新学習指導要領の先行実施が可能となっている。

新学習指導要領の全面実施は小学校が2020年度、中学校が2021年度、高校が2022年度からとなる。この経緯からもわかるように、次期を目指すのは現実的ではなく、早くても次々期以降を見据えた活動を行うべきとしてきた。

【相互理解のための視点・論点の整理】

- ①学習指導要領の所管は『文部科学省 初等中等教育局』であるが、保健体育のみ『スポーツ庁政策課 学校体育室』で対応されている。ただ、スポーツ庁設置前から他教科とは所管は異なっている（文部科学省スポーツ・青少年局）いた。
- ②学校教科書において「スポーツのルールや技術」は主に副読本で扱われるため教科書には載っていないが、ゴルフについてのみ『スポーツと環境』の単元の事例（スポーツと環境破壊）として、ゴルフ場の写真入りで「山野を切り開いて造成されるゴルフ場（ゴルフ）」されている教科書もある。（ゴルフ産業が主張するゴルフ場のCO2削減効果など環境に対するポジティブな説明ではない）
- ③「学校体育」（小学校、中学校、高等学校）のうち、特に小中学校において「体育でゴルフを導入している」との報告を時折聞くが、多くは総合学習の時間などを利用しているものと思われる。
- ④『高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編』（文科省）には「ゴルフ」が明記されているが、体育の専門課程を有する高等学校に限られている。
- ⑤学校体育におけるボールを使った運動は、発達の段階を踏まえ、『ゲーム』（小1～小4）、『ボール運動』（小5～小6）、『球技』（中1以降）に分類され、具体的な内容として「ネット型」、「ゴール型」、「ベースボール型」がある。ゴルフは「ターゲット型」に分類される。
- ⑥バレーボール（ネット型）、ソフトボール（ベースボール型）などの各競技団体でも、義務教育における体育授業との連携を模索した結果、教材として採用されている。小中では、バレーボール⇔ソフトバレーボールやプレルボール、ソフトボール⇔学校体育ソフトボールなど、用具やルールがアレンジされ教育が行われている。
- ⑦NFLによるフラッグフットボール（ゴール型）の学校体育への売り込み戦略は有名だが、2000年前後より当時の全日本フラッグフットボール協会は、

学校への用具の無償配布を精力的に行い、1998年に競技を体験した生徒が40校4500人、2002年には1000校12万人に達し、同年に学習研究社の準教科書に登場した。

- ⑧「フラッグフットボール」は2011年度施行の学習指導要領記載にされた。身体の接触が無く安全で、一定の運動量も確保でき、戦術学習にも最適な教材であり現場レベルでも評価が高い。教材研究も多数報告されている。
- ⑨ゴルフ以外の「ターゲット型」種目には、ボウリング、ダーツ、吹き矢などが挙げられるが、既に学校体育に採り入れられている種目や用具を用いて、「的当て」的な運動カリキュラムを検討し、「転がして当てる」⇒「直接投げる、蹴って当てる」⇒「用具を使って当てる」⇒「ゴルフ」へと発展させて行くことなどが考えられる。
- ⑩ゴルフは既に大学授業では広く教材とされているため、小中高そして大学をまたぐ教材として連続性、体系性のある教材となる可能性が高いが、高校以下の学校期で教材として採用されて行くためには「教育的価値」が証明されていく必要がある。
- ⑪市販される既存のゴルフ動作分析機器は「個人」を対象としたものであるが、個人スポーツである「ゴルフ」を複数や集団でも考えながら学び合える（アクティブ・ラーニングを可能とする）、教具・教材の開発も望まれる。
- ⑫例えば、多くの体育授業に導入される大学教育の場に、開発された教材（機器など）を導入し、ゴルフ授業は単なる「個人レッスンの集合体ではない」ことを教育関係者に広く示すことができるような教育補助教材の開発が求められる。

参考文献

- ・北 徹朗；月刊ゴルフ用品界 2015年8月号、「学窓から見るゴルフ産業改革案5」
- ・北 徹朗；月刊ゴルフ用品界 2016年8月号、「産学協同奮戦日記5」

第4回大学ゴルフ授業研究会プログラム

第4回大学ゴルフ授業研究会

日程：2016年8月18日

場所：武蔵野美術大学新宿サテライト

13:30 受付開始

14:00 開会

14:10 <特別講演>

演題：大学ゴルフ授業への期待と業界ができること

講師：大石順一氏

一般社団法人日本ゴルフ場経営者協会 専務理事
ゴルフ市場活性化委員会 事務局長

14:50 休憩

15:05 <研究報告①>

『ゴルフスイング体操(R)』をおこなった受講生たちの感想

ーこの感想の集計結果から推測される「大学ゴルフ授業」の課題と目標ー

○松村公美子(武庫川女子大学、LPGAティーチングプロ)

15:30 <研究報告②>

ゴルフ用品提供事業から見た大学ゴルフ授業で使用しているゴルフクラブの現状

○高橋宗良(鎌倉女子大学)

15:55 <研究報告③>

底辺拡大を目指すGちゃれの実際と課題

○服部由季夫(星槎大学)

16:45 <事例報告①>

大学のゴルフ授業充実に向けた産業界との連携の経緯と展望

○北 徹朗(武蔵野美術大学)

17:05 閉会

17:30 懇親会

開発教材・教具一覧

大学ゴルフ授業研究会が主催・協力した研究会や研修会で紹介、開発された教具・教材・授業実践法をご紹介します。

①グラスファイバーを加工したスウィング軌道練習器具

2013年・第1回大学ゴルフ授業研究会

提案者：亜細亜大学／松林先生、杏林大学／高橋先生

②廃材（古いテニスボールと古い水道ホース）加工したスウィング軌道練習器具

2013年・第1回大学ゴルフ授業研究会

提案者：亜細亜大学／松林先生、杏林大学／高橋先生

③iPadを利用した多人数の授業実践法

2013年・大学体育研究フォーラム

提案者：武蔵野美術大学／北先生

④アプローチノック

2014年・大学体育全国研修会

提案者：杏林大学／高橋先生、亜細亜大学／松林先生

⑤体重移動練習器具：シーソー（コンパネ板使用）

2014年・大学体育全国研修会

提案者：亜細亜大学／松林先生

⑥アプローチコンテスト（屋内編・屋外編）

2014年・大学体育全国研修会

提案者：武蔵野美術大学／北先生

⑦iPadアプリを利用した授業実践法

2014年・大学体育全国研修会

提案者：武蔵野美術大学／北先生

⑧ゴルフシュミレーションマシンとホームワークの併用型授業実践法

2014年・大学体育全国研修会

提案者：武蔵野美術大学／北先生

⑨ゴルフスイング体操

2014年・第2回大学ゴルフ授業研究会

提案者：武庫川女子大学／松村先生

⑩腰開き防止内転筋利用器具（L字アングル使用）

2014年・第2回大学ゴルフ授業研究会

提案者：武蔵野美術大学／北先生

⑪iPhoneを利用した導入実践指導法

2014年・大学体育全国研修会

提案者：亜細亜大学／松林先生

＜ゴルフ教育研究への投稿・執筆にあたり＞

【投稿資格】

大学および短大で「ゴルフ」の授業を担当している先生。

【原稿種別】

本誌の原稿種別には下記のものがあります。なお、下記1)～3)については、英文タイトルおよび、英語または日本語のアブストラクトが必要です。

- 1) 論文 (査読有)
- 2) 報告 (査読有)
- 3) 授業アイデア提案 (査読有)
- 4) 資料 ※研究会での口頭発表の概要 (査読無)
- 5) その他 ※編集委員会が必要と認めたもの (査読無)

【原稿分量】

制限ありません。

【原稿フォーマット】

ホームページに掲載されているフォーマットをご利用ください。

【発行時期】

オンラインジャーナルのため、投稿は随時受付、査読が完了次第速やかに発行します。

ゴルフ教育研究

第 3 巻第 1 号

2017 年（平成 29 年）1 月 23 日 発 行

発行者：大学ゴルフ授業研究会

編集事務局：〒187-8505 東京都小平市小川町 1-736

武蔵野美術大学身体運動文化北研究室内

TEL&FAX 042-342-6377

E-mail : kita@musabi.ac.jp